

コマツナの多角的な生産安定化技術の開発

【研究概要】

近年、コマツナ生産現場では、高温期に発生する芯枯れ症状や葉の黄化症状等、未知の生育障害が増加傾向にあり、それらの原因究明が急務となっている。一方で、近年コマツナの出荷サイズが大型化しており(以下、大株出荷)、春先収穫での抽苔抑制や、大株出荷に最適な施肥・灌水方法などの栽培管理技術の確立が求められている。そこで、各種生育障害発生の原因解明および応急対策、春先収穫コマツナの在圃性確保、および大株出荷に最適化した栽培管理方法など、コマツナの多角的な生産安定化技術を開発することを目的に試験を実施した。その中で今年度は下記の成果が得られた。

- (1) 「いなむら」の窒素吸収量は作型により異なるが、春および夏まきにおいて「いなむら」草丈 40cm では 30~40kg/10a が適正窒素施肥量となった。
- (2) 伸長性の異なる 6 品種を用いて窒素吸収量を作型と品種を変えて調査したところ、品種に関わらず、窒素吸収量は地上部重に比例するが、作型ごとに回帰直線は異なった。また、品種により草丈と地上部重の関係は大きく異なり、品種、作型ごとに目標収量から窒素吸収量を推定することが望ましいことがわかった。
- (3) コマツナの葉齢が芯枯れ発生株率に大きな影響を及ぼしていることが確認された。また、芯枯れ発生葉ではカリウム、カルシウム、マグネシウムで成分量の減少が認められるが、特に葉身のカルシウムの減少が大きく、カルシウム欠乏が芯枯れ症状の主な発生原因であることが示唆された。